

## 高等学校における 12 小節ブルースの創作活動

—アメリカの音楽教科書における創作の在り方を手がかりとして—

粟木 陽子

(本講座大学院博士課程後期在学)

### Composition Using the 12-Bar Blues in US Schools

Yoko AWAKI

#### Abstract

This study aimed to investigate the kinds of activities that Japanese music teachers should undertake to facilitate their students' understanding of the diverse musical culture of other countries. Toward this end, I analyzed the methods adopted for teaching musical composition in the United States. It became clear that it is considered very important that students there learn composition to help them understand various musical elements or structures and that composition is connected with expanding their approach to music as a whole. Accordingly, classes are held based on the 12-bar blues. First, students listen to various types of music that developed in the United States, such as blues, jazz, and ragtime. They then learn the form of the 12-bar blues and create their own compositions using a rhythm template. It is apparent that activities focusing on listening and composing in classes enable the students to approach the blues in an active manner. These activities allow students to understand how this music developed and aid their study of musical structure, which leads to greater musical appreciation and enriches their entire musical experience.

#### 1 はじめに

高等学校における音楽の授業は、生涯学習・生涯活動としての音楽への橋渡しとして重要な位置づけがなされるべきであると筆者は考えている。小学校や中学校で音楽の諸活動に関する基礎を身に付けたいうえで、高等学校でさらにそれを実践・応用する経験を積んでおけば、高等学校を卒業した後も、音楽全般に対する興味を持ち続けることができるのではないかと考える。そのために、高等学校では、生徒が音楽に対する視野をさらに広げられるよう、さまざまな音楽ジャンル、楽器、演奏形態等を示していくべきであろう。そして、音楽および音楽業界が日々進化していることの価値を考えさせる必要があるのではないだろうか。

そこで筆者は、昨年度、音楽のさまざまな側面を授業の中で取り上げる際の工夫について、授業実践を通して考えてきた。その中でも本論文では、12小節ブルースの創作に関する授業実践について取り上げる。この授業実践を行う際、授業計画や教材研究の段階で、アメリカで実際使用されている音楽教科書を参考にした。アメリカで生まれ、親しまれている音楽が、自国でどのように教材化されているのかを把握することで、より身近な楽曲として我が国の生徒たちに提示できるのではないかと考える。また、楽曲に身近さや親しみやすさを感じることができれば、生涯を通して親しみ、学ぶ意欲を高めることもできると考える。

#### 2 アメリカの音楽教育における創作活動の方針

アメリカでは、1994年に『全米芸術教育標準』(National Standards for Arts Education 以下、『標準』

と示す)が発表された。NAfME (The National Association for Music Education)<sup>1)</sup>によって発表されたこの『標準』は、法的拘束力はないものの、Grades K-12を3段階に分けたうえで、児童生徒が身につけるべき音楽的能力や知識について詳細にまとめられている。さらに、2014年6月にNCCAS (National Coalition for CORE ARTS Standards)として改定された際には、1学年ごとに目標が示されるとともに、音楽の学習を大きく3つ (Creating・Performing・Responding)に分類し、それぞれがどのような活動によって、また、どのような過程を追って習得されるべきかが示された。

今回の発表者の授業実践で参考にした教科書は、1994年に発表された『標準』に準拠したものであるため、ここでは改訂前の『標準』の概要を簡単に述べる。

『標準』は学習すべき内容として9つの領域を示しており、そのうち、日本における「創作」の領域に相当するものが2種類存在する。ひとつは「即興」、もうひとつは「作曲・編曲」である。この2つの領域の具体的な内容をまとめたものが次の表1である。

創作活動の内容が「即興・作曲・編曲」と細分化されている分、多様な活動が求められているといえる。また、表1から、創作活動は13年間の学習の中で、音楽の諸要素の存在や音楽の構成に対する理解を重大な目標として据えていることが分かる。

表1 創作の領域に相当する『標準』の内容

	即興	作曲・編曲
Grades K-4	(a) 与えられたリズムや旋律のフレーズに対して、同様の様式で応答となるフレーズを即興する (b) リズムや旋律のオスティナートによる簡単な伴奏を即興する (c) 有名な旋律に簡単なリズム変奏あるいは旋律の装飾を即興する (d) 従来の楽器、普段楽器として扱わないもの、ボディパーカッション、電子音を含むさまざまな音素材を用いて、歌唱や楽器による小品を即興する	(a) 朗読や芝居の伴奏音楽を作曲・編曲する (b) ガイドラインに沿って歌唱や楽器による小品を作曲・編曲する (c) 作曲する際、さまざまな音素材を用いる
Grades 5-8	(a) 単純な和声的伴奏を即興する (b) ペンタトニックや長音階を用いた旋律に、旋律的装飾や単純なリズムおよび旋律の変奏を加えて即興する (c) 一貫した様式、拍子、調性の中で、無伴奏あるいはリズム伴奏のついた短い旋律を即興する	(a) ガイドラインに沿って、まとまりと変化、緊張と解放、バランスなどの音楽の諸要素を示しながら、ガイドラインに沿って小品を作曲する (b) 既存の作品をもとに、単純な歌唱あるいは楽器による小品を編曲する (c) 作曲・編曲をする際、従来の楽器、普段楽器として扱わないものを含むさまざまな音素材や電子媒体を用いる
Grades 9-12	< Proficient <sup>2)</sup> > (a) 様式的に適切なハーモニーのパートを即興する (b) ペンタトニックや長音階、短音階による旋律に対して、リズムまたは旋律の変奏曲を即興する (c) 一貫した様式、拍子、調性の中で、与えられたコード進行に沿った独自の旋律を即興する < Advanced <sup>3)</sup> > (d) さまざまな様式に沿って、適切なハーモニーのパートを即興する (e) 一貫した様式、拍子、調性の中で、与えられたコード進行に沿った独自の旋律をさまざまな様式で即興する	< Proficient > (a) 音楽の諸要素を用いて創造的に実演しながら、いくつかの独特な様式の音楽を作曲する (b) 音楽の表現効果を保守あるいは強調する他の方法で、歌唱あるいは楽器による小品を編曲する (c) 音素材の従来の使用方法や音域の知識を示しながら、さまざまなアコースティックあるいは電子楽器、歌唱による音楽を作曲・編曲する < Advanced > (d) 作曲の原則を生かしながら、創造力や専門技術を示すために作曲する

### 3 アメリカの教科書にみる創作活動

#### (1) 教科書の概要

近年のアメリカ初等教育・中等教育現場で多く用いられている教科書のひとつとして、Pearson Scott Foresman社が出版している*Silver Burdett Making Music* (以下、*Making Music*と示す)シリーズが挙げられる。この教科書シリーズは、2002年に発刊した音楽教科書シリーズの改訂版である。2005年に1度目の改訂が行われたのちに、2008年に2度目の改訂がなされた。さらに近年では、Alfred Music Publishing社<sup>4)</sup>と共同で開発されたオンライン教材*Silver Burdett Interactive Music* (2012)が発表され

るなど、教科書のデジタル化が進められつつある。*Making Music* シリーズは、先に述べた『標準』に準拠しており、アメリカ国内の多くの音楽教師や研究者の考えが反映された教科書であるといえる。

## (2) *Making Music* にみる創作活動の傾向

ここでは、*Making Music* シリーズの指導書を参考に、アメリカにおける創作活動の内容や授業展開などについて、例を挙げながら述べる。

### ・ Grades K-2

時計の針の様子を、ウッドブロックやトライアングルで表現したり、動物の鳴き声をさまざまな楽器で表現したりといった、音を模倣する活動が多くみられた。また、身の回りにあるものを利用して手作りの楽器を作って音色を味わうなど、この段階での創作活動が音色そのものに着眼していることが読み取れた。

### ・ Grades 3-4

他の学年よりも、比較的多く創作活動に関する単元が多く設定されている学年である。特に多くみられるのは、旋律やオスティナートの創作である。これらの活動には、4分音符から16分音符及びそれに準ずる休符、シンコペーション、ペンタトニックを用いるよう、題材ごとに指示がある。音楽の構成を理解するとともに、知識を定着させるための創作活動が展開されているといえる。また、物語の合間に打楽器で効果音を入れたり、楽曲や詩の朗読に合ったリズムオスティナートを創作したりといった、感性や想像力の育成を目指した創作活動も取り入れられている。

### ・ Grades 5-6

全体的には、Grade-4以前の学習内容を応用するための創作活動が展開される。ただし、これまでのように使用する音楽の諸要素が細かく指定されることはなくなり、ある程度創作の自由度が増したという印象を受ける。

### ・ Grades 7-8

Grade-7からは、ギター演奏に関する学習内容が教科書に掲載されるようになる。そのため、コード進行に沿って旋律や歌詞を創作する活動につながるような教材が多く設定されている。加えて、生徒たち自身で演奏を録音・編集したり、諸外国特有のリズムを用いてリズムアンサンブルを創作したりすることで、社会や文化と音楽の関連性にも視野が広がるような創作活動が取り入れられている。

## 4 日本における創作活動への活用の展望

アメリカの音楽教育における創作活動に関して、複数の視点から概観した結果、以下のようなことが推測できた。

第一に、創作活動とは、音楽の諸要素や楽曲の構成を理解するために不可欠な学習活動であるということである。使用する要素に制限をかけるということは、単に音を並べて楽しむだけで終わるのではなく、学習のねらいを焦点化し、そこに向かうまでの過程を具体的にするというのではないだろうか。

第二に、創作活動が「音楽に対する視野の拡大」へとつながる可能性があるということである。*Making Music* シリーズの検討からは、創作活動を行う過程やその前後で、国内外の文化や社会が音楽とどのように関連しているのか思考する機会が設定できるということが分かった。実際に創作を行いながらの学習はもちろんであるが、創作を行うまでに積み重ねてきた学習が効果を発揮するといえるだろう。

アメリカの児童生徒にとって、ブルースは自国で生まれた音楽ジャンルであり、耳にする機会も多く、比較的身近な存在といえるだろう。一方で、日本の児童生徒にとってブルースは、聴いたことはあるものの、文化的・歴史的背景や楽曲の特徴までを知る機会は少ないため、なじみのある音楽ではないと考えられる。他国の音楽を題材とした創作活動を実施するためには、前提条件として、その国の音楽あるいは音楽ジャンルの特徴を丁寧につかみ、独特の響き、テンポ感やリズム感に対して少しずつでも慣れていく必要があると推測できるであろう。

## 5 授業実践

### (1) 実践した授業の概要

これまで述べてきたことをふまえて筆者は、平成26年2月上旬から3月にかけて、高等学校1年次における授業実践を行った。行った授業の概要を、以下に示す。

1 題材名	アメリカで生まれた音楽ジャンルに親しもう		
2 学科・学年	X 高等学校 普通科 第1学年 A組 26名 B組 8名 C組 23名 計 57名		
3 実施時期	平成26年2月中旬～3月上旬		
4 使用教材	Every Day I have the Blues / B. B. King Maple Leaf Rag / Scott Joplin Moanin' / Bobby Timmons Sing Sing Sing / Louis Prima		
5 題材目標	アメリカで生まれたさまざまな音楽ジャンルの音楽的特徴を理解する		
6 指導と評価の計画			
		評価の観点【評価規準】	評価方法
第一次(2時間) アメリカで生まれた音楽ジャンルを聴き、音楽的特徴を聴取する	①アメリカで生まれた音楽ジャンルとその文化的・歴史的背景との関連や、演奏者による表現の違いに興味を持ち、鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。【音楽への関心・意欲・態度】 ②ブルース・ラグタイム・ジャズの音楽的特徴(リズム・旋律・音色・和声)を知覚し、それらの動きが生み出す特質や雰囲気などを感受しながら、楽曲の文化的・歴史的背景や、作曲家及び演奏者による表現の特徴を理解して、楽曲や演奏を解釈したり、それらの価値を考えたりして、音楽に対する理解を深め、よさや美しさを創造的に味わって聴いている。【鑑賞の能力】		・発表内容 ・ワークシートへの記述内容
第二次(2時間) 12小節ブルースの仕組みを学習し、創作する	①12小節ブルースの音楽的特徴(旋律・リズム・和声)を知覚し、それらの動きが生み出す特質や雰囲気などを感受しながら、音階の特徴を生かして旋律を作り、表現したい音楽をイメージして音楽表現を工夫し、どのように音楽をつくるかについて表現意図をもっている。【音楽表現の創意工夫】 ②ブルーノートの特徴や、旋律の反復、変化、対照などの構成を工夫した音楽表現をするために必要な創作の技能を身に付け、創造的に表している。【音楽表現の技能】		・行動観察 ・ワークシート及びノートへの記述内容
7 学習の展開(第二次 1時間目)			
過程	生徒の学習活動	教師の働きかけ 指導上の留意点など	評価方法 【評価規準】
導入 5分	号令 前時の振り返り 本時の学習内容の提示	・前回鑑賞した楽曲のうちの1曲が12小節ブルースであることをふまえ、本時から創作を行うことを述べる。	
展開 15分	12小節ブルースについて ・コード進行について ・ブルーノートについて	・既習内容であるコードネームの復習を兼ねて、12小節ブルースのコード進行を確認する。 ・グループごとにキーボードを使用し、ブルーノート・スケールと長音階の響きの違いを比較する。	
展開 20分	12小節ブルースの創作 ・ルール確認 ・グループで演習(グループごとにキーボードを使用)	・教師が実際に例を見せながら、小節ごとに使用できる音やについて説明する。 ・演習の進度が遅いグループには、ブルーノートを除きコードにだけ着目すること、音高や音の上行・下行に規則性をもたせるよう指導する。	【音楽表現の創意工夫】 ・行動観察
まとめ 5分	今回の学習内容の確認 号令	・今回は本時の続きに取り組み、12小節ブルースを完成させることを伝える。今回の授業の最後に作品発表の時間を設けることも併せて伝えておく。	

(第二次 2時間目)			
過程	生徒の学習活動	教師の働きかけ 指導上の留意点など	評価方法 【評価規準】
導入 5分	号令 前時の振り返り 本時の学習内容の提示	・本時で前回から取り組んでいる12小節ブルースの創作に引き続き取り組むことを伝える。	
展開 25分	12小節ブルースの創作 ・試演と修正 ・ノートへの清書	・ある程度形になったグループの作品を電子ピアノの自動伴奏に合わせて演奏し、音同士が濁る部分や全体的な統一感に関して問題点を指摘して改善方法を考えさせる。 ・ノートへの清書を行う際、基本的な記譜のルールを確認させる。	【音楽表現の技能】 ・行動観察 ・ワークシート及びノートへの記述内容
展開 10分	作品発表	・グループごとに、苦労した点や工夫した点、アピールポイントなどを述べさせる。 ・各グループの作品を自動伴奏に合わせて教師(または生徒)が演奏し、教師がその場で作品ごとのよい点など、講評を述べる。	
まとめ 5分	本時の学習内容の確認 号令	・ブルースをはじめとするアメリカで生まれた音楽ジャンルについて振り返らせ、今後の授業などに生かすよう述べてまとめる。	

まず、実際の創作活動を行う前に、ジャズやラグタイムなども含めた、アメリカで生まれた音楽ジャンルについて鑑賞することとした。ワークシートを用いて各音楽ジャンルが誕生した経緯を歴史的・文化的側面から学習するとともに、リズムや旋律、ハーモニーなどに着目して音楽の特徴を聴取し、グループごとに話し合わせたり意見を発表したりする時間を設けた。

創作活動を行う際には、前時で取り上げた楽曲が12小節ブルースであることを伝えたくて、ワークシートを用いて、楽曲のコード進行や使用される音階といった12小節ブルースの仕組みを説明した。次に、12小節分のリズムテンプレートを提示し、創作の手順や注意事項を説明したのちに、個人あるいはグループごとに創作を行うこととした。授業終了前にグループごとの作品を記録した五線譜のノートを回収し、電子ピアノにあらかじめ記録しておいた伴奏に合わせて教師が作品を演奏し、作品発表の機会を設けた。また、各グループの作品を楽譜作成ソフトで清書し、教室内に掲示した。

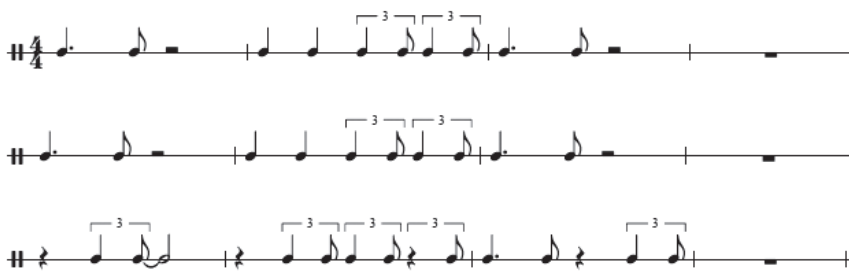


図1 生徒に提示したリズムテンプレート

## (2) 成果と課題

創作活動の前に鑑賞の授業を行ったことは、創作活動に向けた導入として非常に有効であったと考えられる。19世紀以降のアメリカの歴史にも触れることで、横断的内容を盛り込んだ授業となり、生徒の音楽に対する視野を広げる契機となったといえる。

創作を実際に行った際、1番最初に実施したC組では、グループごとの創作の前に個人での創作を行わ

せた。しかし、ブルースの仕組みを理解しきれなかった生徒や、楽譜に抵抗感のある生徒は、自主的に取り組む姿勢がなかなか見られなかった。そのため、残りの2クラスでは最初からグループごとに創作に取り組ませたところ、音を選ぶ人、メモを取る人、意見を述べる人、ルールに沿って作曲できているか確認する人などに役割分担をすることができたため、比較的順調に創作が進んでいた。

ある程度作品が完成したグループから、ブルーノートを用いて工夫するよう助言したところ、提出された作品のほとんどにブルーノートが使用されていた。図2は、生徒が創作した12小節ブルースの一例である。(A)では、ブルーノートを多く用いて独創性をもたせようとはしたものの、かえってそれが伴奏のハーモニーと不協和音を生じさせる原因となっていた。(A)を創作したグループでは、当初ブルーノートを使用せずに完成させた作品にあとからフラットを書き加えており、伴奏との兼ね合いを特に意識していなかったといえる。また、図2の(B)では、ブルーノートを効果的に使用できている小節と、旋律のブルーノートと伴奏のハーモニーとで不協和音になってしまっている小節とが混在している。しかしながら、(B)の2小節目や6小節目では、いずれも3拍目と4拍目で同一音型が繰り返し用いられており、旋律の規則性や作品全体における統一性を意図して創作した様子が読み取れた。このような工夫は、提出された作品全18曲のうち、10曲に見受けられた。したがって、(B)のような作品が創作できる場合、音の重なりにまで意識を向けることは難しかったものの、旋律の横のつながりに関して工夫を施し、部分的に楽曲をまとめる能力は身につけていると判断できよう。

今回はブルーノートの使用や音の高低に着眼点を絞って創作させたが、創作途中の段階であっても伴奏に合わせてみるのができなかったために、(A)や(B)のような問題点が生じたと考えられる。現に、図3の作品を創作した生徒は、創作途中の段階では2段目(5～8小節目)にもブルーノートを使用していたが、他の生徒よりも早く作品が仕上がったため旋律と自動演奏による伴奏とを組み合わせ聴かせたところ、不協和音が生じていることに気づき、修正を加えた。このような取り組み状況がみられれば、ブルーノートという楽曲の特徴を理解しただけでなく、伴奏と旋律との組み合わせ、すなわち音の重なりを意識して作品を上げる力が身についたといえるのではないだろうか。



図2 提出された生徒の作品例



図3 提出された生徒の作品例 (2)

これらのことから分かるように、ブルースに対する理解をさらに深めるためには、各グループに伴奏を録音した音源を用意するなど、常に旋律と伴奏との組み合わせを意識しながら創作に取り組ませることが重要であるといえよう。また、楽曲の中でできた不協和音の部分、生徒たち自身が気づけるかどうか、もしくは、教師側がどのように気づかせ、修正させるかが鍵になるとも考えられるだろう。

## 6 おわりに

今回の授業実践を通して、音楽に対する視野の拡大とは、単なる「音楽に関する新たな知識の習得」ではないということが明確になった。それぞれの音楽ジャンルが誕生した経緯を学び、実際にそのジャンルの楽曲が誕生する場面を目の当たりにすることで、生徒は一層その楽曲たちに興味を持ち、音楽に対して能動的な姿勢をもてるようになるのではないだろうか。

ただし、学校の授業で取り上げられる音楽の世界はごく一部であり、音楽のすべての側面を生徒に提示することは、不可能に近い。重要なのは、生徒自身が「音楽にはこんな面もあったのか」と気づく体験をすることである。そういった体験があれば、生徒は自然と「音楽の学び方や楽しみ方」をも身に付けていくはずだ。教師の役割は、そのためのきっかけ作りであるということを中心に留めて、これからも努力を重ねていきたい。

## 註

- 1) 1907年に発足した、音楽教師や研究者らによる音楽教育機関であり、現在では約60,000人の会員を有している。各種大会の開催、単行本や機関紙 (Music Educators Journal) の出版などを行っている。
- 2) Grade-8から技能・知識ともにさらに1・2年を超えるレベル。
- 3) Grade-8から技能・知識ともにさらに3・4年を超えるレベル。
- 4) アメリカのロサンゼルスに本社を置く、世界有数の教育系楽譜出版社。学生や教師・専門家などあらゆる対象に向けて、多様な音楽ジャンルや楽器に関する楽譜・CD・DVD・ソフトウェアなどを販売している。また、アメリカ国内だけでなく、ドイツやオーストラリアなどの国外にも支社を置いている。

## 参考文献

- Beethoven, Jane. et al. (2005). *Silver Burdett Making Music 2008 Edition, Grades K-8 Teacher's Edition*. Illinois: Pearson Scott Foresman.
- Consortium of National Arts Education Associations. (1994). *National Standards for Arts Education: What Every Young American Should Know and Be Able to Do in the Arts*, Maryland: Rowman & Littlefield Education.
- 板垣和子 (2013) 「総合的な音楽力を高める授業づくりの実践—創作と鑑賞の授業を通して—」『山形大学大学院教育実践研究科年報』No.4, pp.42-49.